

同郷の歌人・内田紀満による「斎藤喜博論」 —『群馬短歌史』から—

※ 内田紀満.“第5章 斎藤喜博論”. 群馬短歌史: 第II部戦後編. 新日本歌人協会, 1969, p.283-360.)

※ 同著では「斎藤」「斎藤」の表記が揺れている部分があるが、引用は原典に倣っている。

アララギの歌人・内田紀満は、著書『群馬短歌史(第2部)』の中で、1章を「斎藤喜博論」に割いている。

以下、内田の斎藤喜博論を引用し紹介したい。

内田は喜博を歌集ごとの時代に分けて論評している。また、歌論も整理して紹介しているが、興味深い論考の一つに、戦中戦後の喜博と文明の、戦争に対する記述や発言を、やや批判的なニュアンスで指摘した部分を、まず挙げておきたい。

戦争体験

※ 以下、(p.)の表記は、引用した『群馬短歌史(第2部)』の該当ページ。

『羊歯』

の時代

斎藤喜博の戦争体験は、狂信的ファシストのそれではないが、協力体制の中にずるずると傾斜しすべりこんでいったということではないだろうか、(p.294)

土屋文明の写実主義もその部分的継承の典型と思われる斎藤喜博の眼も惜しいことに真のリアリズムに止揚することができず、帝国主義的侵略戦争の厚い壁の前には、あえなくもくずれ去ったのである。(p.297)

内田紀満：1932（昭和7）年～

喜博と同郷の芝根村※（沼ノ上、現玉村町五料）出身の教育者、歌人。

国語教師を経て、自費出版社「現代書房新社」を立ち上げる。アララギの五味保義に師事して『石臼の歌』『公害抄』『群蜂移動』『群萌』『貂』『憑河』『群馬短歌史』などの歌集・評論集を発表。ほかに、角川全国短歌大賞の選考委員を務めるなど活躍した。

※ 喜博は芝根村川井（現玉村町川井）出身

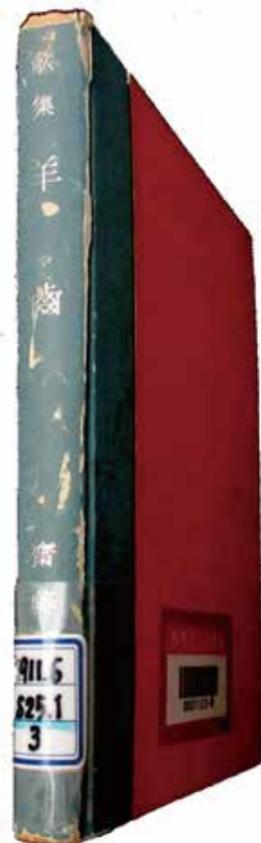
僕らは芸術家風をなげすてて、芸術的な言葉づかいなどはやめ、市井のありふれた人間になりきって、その中に真実を求めて歩むという、理知と情熱とをかねそなえた新しい芸術家をつくらねばならないと思う。(斎藤喜博.『アララギ』20. 12)

望近き月ののぼれる野をゆけばあはあは
として赤城見ゆるを (1935年 病後)

歌集『羊歯』の基調をなす世界は、その巻末小記で作者自らが書き記しているように、谷蔭の羊歯の如く傷つき生きながらえてきた小市民インテリゲンチヤのため息にも似た抒情である。これはまた日本の暗い青春の谷間と重なりあいながら、昭和十年代の歴史的状況を微妙に反映している点に特徴があるといえよう。(p.300)

『羊歯』（昭和26年、草木社刊）

喜博の第一歌集『羊歯』には、昭和10年から21年までに「アララギ」「ケノクニ」「柊」に発表した歌の中から、487首が掲載されている。ブルーグレーの背、朱の表紙。それを縁取り分ける繊細な金箔線、銀箔押し of 背文字。この洒落た本の装丁は、本県出身の洋画家・山口薫によるものである。



※ 書名は正しくは『證』

みぎはべの狭き砂地の鳥跡に心は足らふ
疲れ来ぬれば (1947年 利根河畔にて)

わたしは自分の生命をいつくしんでいる。自我を大事にしている。同時に他の人の生命や自我もいつくしまずにはいられない。しかし、生きている生命というものは、形象化以外に存在の証を立てることは出来ない。だから私は、自分の大事な生命をいかに充実して生きるか、真実に生きるかということ短歌によって証拠立てたい。

(歌集『證』巻末記)

… 喜博の表現手法は社会科学的な視点から生活現象を分析しようとするもので、上州人的性格をむしろ否定することによって今日に生きる肯定的な現代人をひきだそうとする方法をとったのである。(p.313)

齊藤喜博は、このような群馬にあって、農民や教師の正と負の多彩な言動を克明に記録し、合理主義の立場から厳密に分析し、短歌的形象化を通して事実からすべての物事をリアルに判断する喜博的思考方法を確立した。

歌集『証』はそういう意味で、土着性のエネルギーにあふれたユニークな文学として現代短歌史の一頁を飾るものであり、歌人としての齋藤喜博の地位を不動のものとした。(p.314)

俺のことは俺が一番知ってゐる批評は君らにもゆるされてゐる (1953年 さびしき悔)

… 本歌集を二回読み通して、私の印象に残ることは、短歌的形象化の低調なものや独善的表現が目立ち、旧来からの抒情によりかかりすぎて詩精神の開拓がみうけられない、ということだ。(p.352)

歌集『職場』は第二歌集『証』より狭い地点でうたわれた個人的な感慨を集めたもので新しい短歌を指向した証時代のような緊張や破綻が少ない。『証』以上のものではない。(p.360)



『職場』(昭和35年、白玉書房刊)
昭和28年から35年まで、41歳から49歳までに制作・発表した1,068首を掲載。『アララギ』『ケノクニ』のほか、『白藤』『柊』『群山』『あをば』『短歌』『短歌研究』『新日本文学』などへの寄稿を含む。

歌が詠まれた時期は、島小勤務の時代とほぼ重なり、賞賛と批判とを受けた時期でもある。装丁の宮本利男はこの歌集に、黒と白の粗い手触りのクロス装を施し、太い明朝系の題字をプリントした。それは喜博の戦いの意思まで感じられる強さを持っている。中程の頁にゴッホの線画が口絵として添えられていることは前2集とは変わった趣だ。巻頭には上野が口絵を描いており、そのモチーフはジャガイモである。この連関にはゴッホの『馬鈴薯を食べる人々』が想起させられる。『馬鈴薯…』に描かれた農民のたくましさや境島村に重ねたのかもしれないが、そのアイデアは喜博だったか、上野だったか。



『証』(昭和28年、草木社刊)

昭和22年から27年までの6年間に「ケノクニ」掲載歌を中心に、「はまゆふ」「柊」「はしばみ」「短歌研究」などに発表した全作品、750首を掲載。直上に引用した巻末記からは、喜博の歌人としての気概があふれている。

装幀は高橋錦吉。口絵に銅版画を寄せている上野省策は図画工作の専科教師で、赴任した芝根村小学校で喜博と互いに理解しあう仲となった。

余談ながら、アララギの中心歌人・近藤芳美は、上野の『憂愁』という作品に惚れ込み、自身の歌集『早春賦』の印税をはたいて購入し、自宅に飾っていたという逸話が伝えられている。